

## 関西大学独逸文学会研究発表概要（第112回研究発表会）

その他のタイトル	Resumee der Forschungsberichte bei der Tagung 2019
著者	永沼 琴子, 福瀧 量子
雑誌名	独逸文學
巻	64
ページ	45-48
発行年	2020-03-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00020081">http://hdl.handle.net/10112/00020081</a>

## 関西大学独逸文学会研究発表概要 (第112回研究発表会)

### 1. ドイツ語における句読点の歴史

永沼 琴子

本発表では、古高ドイツ語から初期新高ドイツ語までの様々なテキストを用いて、句読点の歴史を概観した。まず初めにドイツ語の文献ではないが、分かち書きがなされていない例として、銀文字聖書と呼ばれるゴート語聖書(Silberbibeln、原本：4世紀、写本：6世紀)を引き合いに出した。テキストでは語が連続して書かれており、どこで切るかは一目ではわからない。また所々語の右側に点被打たれており、何らかの区切りを示していると思われる。

余白を用いた分かち書きの習慣が生まれたのは、西暦500年頃である。書き言葉は当初、説教や朗読のために使われていた。朗読するのであれば、声によって意味の切れ目を浮かび上がらせることができるが、黙読になると目で語を識別しなければならなくなる。このような経緯で分かち書きがなされるようになったのである。ドイツ語文献は750年頃から歴史に登場してくるため、最初から分かち書きの文化があったことになる。

古高ドイツ語(750-1050年)の資料として、オトフリートの福音書(Otfrids Evangelienbuch、9世紀)とメルゼブルクの呪文(Merseburger Zaubersprüche、原本：8世紀、写本：10世紀)を挙げた。両者とも分かち書きされている。また前者のテキストでは、文中の区切りには中黒、文末には語の右上に点被打たれている。一方後者で確認できるのは中黒だけである。

次に取り上げたのは、中高ドイツ語(1050-1350年)で書かれたニーベルンゲンの歌(Das Nibelungenlied、13世紀)である。これは1節4

行の韻文であるが、実際の写本では散文のように改行せずに書かれている。句読点に関しては中黒と、主に韻の箇所を目印に語の右下に点が打たれている。同時期の資料として、低地ドイツ語で書かれたザクセンシュピーゲル (Sachsenspiegel, 1225年) も提示した。こちらは中黒が確認できた。

次に紹介したのは、マネッセ写本 (Codex Manesse, 14世紀、図1) である。その中でも、詩人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ (Walther von der Vogelweide, 1170-1230) のミンネザングを使用した。そのミンネザングは図1の左下のIから始まっている。韻文だが、ニーバルングンの歌と同様に散文風に書かれている。以下は脚韻がわかるように、書き直したものである。

Ich saz ûf eime steine,  
dô dahte ich bein mit beine,  
dar ûf sazte ich mîn ellenbogen,  
ich hete in mîne hand gesmogen  
daz kinne und ein mîn wange.

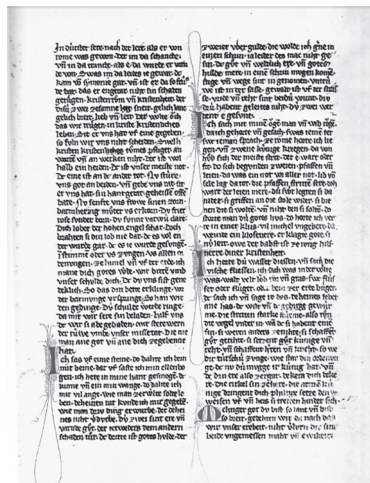


図1、マネッセ写本、14世紀

私は岩の上に座り、  
脚を組み、  
その上に肘をつき、  
手の中に顎と頬をうずめて  
そこで黙って深く考えた。

マネッセ写本も句読点にはもっぱら中黒が用いられている。

ドイツ語文献ではないが、初めての印刷本ということでゲーテンベルク42行聖書 (42-zeilige Bibel, 15世紀) も取り上げた。テキストはヴルガータと呼ばれるラテン語聖書である。ドイツ語とは異なり、もうすでにピリオドが見られ、他にも中黒、コロンのクエスチョンマークが見られる。

次に初期新高ドイツ語（1350-1650年）のテキストの紹介に入った。まずはドイツ語で書かれた印刷本としてかなり初期のものと言えるエーデルシュタイン（Der Edelstein、1462年、図2）である。これも韻文だが散文のように書かれており、読んでいくと韻を踏んでいることがわかる。ゲーテンベルク42行聖書とは違いピリオドはまだなく、中黒が使われている。



**Don-Grühe-**  
 geschliche nye verdros - An einē wasser reug in sein  
 weg - Do want er wēd pruch nach key - Do was au  
 ch schif nach man - Zu fulle muōt er ubre gau - Do  
 er were ham in den puch - Dē schact uō dē fleisch er  
 do sach - Das er in seinē müde reug - Er sprach ich hie  
 er wol genug - Alldie ich das buch zu dirten han -  
 Ich lobte er darnach gewisē begā - Ich wolt es re  
 auch begreifen - Do muōt yu das vnder Buche mit  
 wendē - Das er in seinē müde sach - Do hant er in ge  
 ofs ungenach - Das er schif buch hat woforn - Durch  
 grühe die was yu zorn - Der schact uō dem buch  
 in berougē hat - Das geschicht noch an müde har -  
 Das wil dich ein lrächter wan - Berougē scauf wite  
 man - Der war thut durch unschreder - Das yu di  
 ch wite - Ich wite lig hat das sein müde ist - Alldie ist  
 das yu das geschicht - Geheir wite ofmer gut -  
 Sie berougē müde mensche mit - Das sein scauf

図2、Der Edelstein、1462年

活版印刷技術の恩恵を受けて、広く影響力を發揮したのは、宗教改革者マルティン・ルター（Martin Luther, 1483-1546）によるルター聖書（Lutherbibel）である。使用したテキストは1545年版のマルコによる福音書の冒頭である。新しい句読点として、斜線のヴィルゲル（/）が登場する。そしてドイツ語文献にも、文末を表すピリオドが姿を現してくる。他方これまで見られた中黒は姿形もなく、果たしてヴィルゲルが中黒に取って代わったものなのかについては、今後分析する必要がある。

最後に民衆本（Volksbücher）と呼ばれるテキストを二つ取り上げた。オイレンシュピーゲル（Eulenspiegel, 15世紀）と、ファウスト博士の物語（Historia von D. Johann Fausten, 16世紀）である。どちらもルター聖書と同じく、ヴィルゲルとピリオドが用いられている。

以上、句読点に着目しながら、古高ドイツ語から初期新高ドイツ語までのテキストを中心に見てきた。ドイツ語の文献では、切れ目なく語を連ねるといった原始的な方法とはらず、最初から分かち書きの文化があったことが確認できた。句読点に関しては、9世紀のオトフリートの福音書から15世紀のDer Edelsteinまで、中黒が主な句読点であった。16世紀に入ってようやく、新しい句読点としてヴィルゲルと、文末を表すピリオドが登場したと言えるだろう。ヴィルゲルに代わってコンマが普及

し始めるのは17世紀の終わり頃である。

## 2. ルターとピスカートアにおける 隠喩 (Metapher) と聖餐の理解について

福瀧 量子

この発表では、ピスカートアとルターにおける隠喩 (Metapher) の捉え方について、テキストに即して考察していく。ピスカートア (Johann Piscator) は、1602年から1604年にかけて、宗教改革以降の最初の完全な全訳聖書を、改革派の土壤のもとで出版したことで知られている。ピスカートアの隠喩理解は、アリストテレスの伝統的な隠喩理解を踏襲したものであった。彼によれば隠喩はトロポスの一種であるという。ここでのトロポスとは或る言葉の本来の意味が別の意味に置き換えられるものであると彼は言っている。それに対してルターは、隠喩は新しい意味を与えるもので、ただの置き換えではないという、当時では斬新な捉え方をしていた。またピスカートアが隠喩における *ist* (～である) を *Zeichen* (しるし、記号) と捉えているのに対し、ルターは *ist* は *Zeichen* ではないと考えている。そのため、聖餐の言葉の隠喩における *das ist mein leib* について、ルターと改革派では理解が異なる。この相違によって、聖餐理解は共在説と象徴説という二つの説に分かれる。

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]